

教育立国フィンランド流 教師の育て方

増田ユリヤ 著

この本の題は「育て方」となっているが、あまり熟していないものの「育ち方」としたほうがよりの確に内容を表すと思われる。北欧の国フィンランドはOECD（経済協力開発機構）が2000年から3年ごとに行っている「学習到達度調査＝PISA（Programme for International Student Assessment）」において、常に「世界一」の学力を維持してきた。（本項は本書第1章を適宜転載した）

このことは全世界の注目するところとなり、見学者が多く、わけても日本からの見学者が最も多いという。なぜフィンランドがこのような成果を上げているのであろうか？ 教育ジャーナリストである著者は5回にわたって同国を訪れ、その見聞を本書に纏められた。

本書の主題となるPISAとは義務教育終了段階の15歳児が持っている知識や技能を、実生活の様々な場面で直面する課題に、どの程度活用できるかを評価するものである。PISAの設問は、読解力、数学的リテラシー（リテラシーとは理解力・応用力のこと）、科学的リテラシーの3分野からなる（2003年調査はこれに問題解決能力が加わった）。

フィンランドは、安定してトップレベルの成績を収めている。2006年調査で重点が置かれた科学的リテラシーについても、特に優れていたという分析結果が出ている。

一方日本は、2006年調査で、科学的リテラシーが前回の2位から6位になっただけでなく、最初の調査で1位だった数学的リテラシーが10

位、読解力は15位と回を追うごとに順位が後退している。

このことは日本人として心の痛むことであるが、PISAの結果が悪いからといって目の色を変え、「フィンランド詣で」と揶揄されるほどフィンランドに押しかけ、彼の国のすべてを学ぼうとするのは如何なものであろうか？（フィンランドを訪問する教育関係者たちが、熱心にノートを取り写真撮影をする一方で、「フィンランドは素晴らしい。でも日本で同じことをやろうとしても無理」とだけ言い残して帰っていく……）（終章）

「ひとのふり見てわがふり直せ」という諺がある通り、なぜフィンランドは素晴らしく日本では無理なのか？ TVでも報じられたが、都立科学技術高専や町工場の技術者による超小型衛星等々、日本にも素晴らしいものは多くある。「ひとのふり」「わがふり」を根源的に問いかけ、教育を本質的に問い直す好著であらう。なお各章のタイトルと小見出しを付記する。

第1章 フィンランドの教育制度

第2章 フィンランドの教育現場を訪ねて

1 フローラ保育所

2 アラビア総合学校（小・中学校）

3 ヘルットニエメンランタ小学校

4 テヘターンピスト総合学校（中学・高校）

5 ポホヨイスハーガ総合学校（中学・高校）

第3章 フィンランドの教師たち

1 教師の一日

2 教育実習の現場

3 ヘルシンキ大学教育学部教員養成学科長 マッティ・メリ教授に聞く

4 町場の学校で教育の現状を学ぶ

5 寄り道ばかりの教師たち

6 現職の教員研修

終章 フィンランド・ブームと日本の教育の行方

（岩波書店、203頁、1680円）（芦田守道）